

## 口頭発表「学校全体での教室内飼育の実践例の発表」

羽田千恵子



### 1 はじめに

本校は大正4年に高崎市立東尋常小学校として開校され、創立94年目を迎えています。

高崎駅に近く、高崎観音に見守られたにぎやかな市街地にある学校です。学校は地域のオアシス的存在であり、アパートやマンションの立ち並ぶ地域にあり、動物の存在とは縁のうすい地域であります。また、史跡やお寺・神社などの多い旧城下町の歴史のあとがいたるところに見られる新旧の文化が共生している校区であります。児童数160名の小規模校ですが、そのよさを生かして1年から6年までの異学年の縦割り活動も年間通して行われていて子どもたちは、名前を呼び合ったりして人間関係を豊かにする活動を重ねています。

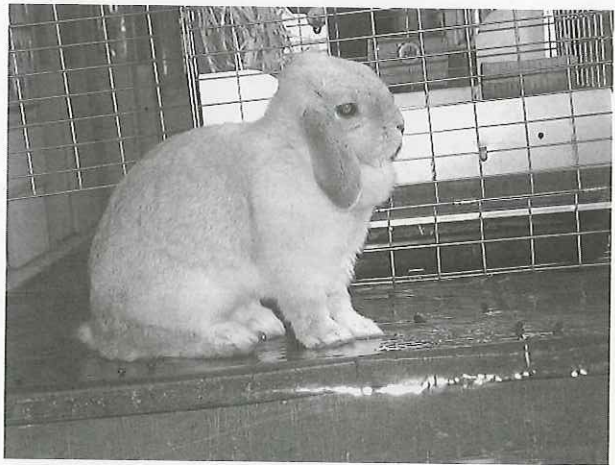
本校は高崎市の「特色ある学校」の指定を受け1年目の途中であります。感性を磨く教育をめざして、生命を育てることを通してその大切さに気づき心優しい目で生命を見つめ守り育てる子どもに育てたいと願っています。植物を育てる「花いっぱい運動」とともに「ウサギさん大好き」の活動も力を入れて取り組んでいます。子どもたちの心に、動植物を見たり触れたりするとともに、一緒に生活することで、身近で弱い存在の小動物がいかにか子どもたちの心に迫り、揺さぶり毎日世話をしてやらなければ死んでしまうという切実な思いをもつことができるかが鍵となるであろうとわくわくする思いで取り組んでいます。

### 2 ウサギとの出会い

19年度の秋、ホーランドロップ種のうさ

ぎが一羽、県総合教育センターよりやってきました。まっ白で気立ても優しくおとなしい「ロップ」という名前のうさぎです。県総合教育センターふれあい動物事業の一環として行われている事業であります。子どもたちも賛同して5年生の学級で飼育を始めました。5年生のうさぎのところへは、他の学級の子どもたちも興味関心を持って、うさぎをめざして立ち寄り、集まっては触ったり話しかけたりしていました。

そのうち1年生の学級から飼育したいという要望があがりました。まずいきなり赤ちゃんうさぎよりは、やや成長したうさぎのほうが飼育しやすいだろうという獣医さんのアドバイスをいただき、メスのやや成長したうさぎ「ハリー」を10月より飼育し始めました。そしてその経験を生かして、11月より赤ちゃんうさぎ「ホップ」の飼育を始めました。



獣医さんがケージに入れてうさぎを連れてきてくださった初対面の日の子どもたちの反応は、感動的で「かわいい!」「小さいな」という純粋な言葉と輝く瞳の表情でした。「これからはみんなに任せるから世話をしてね。」とおっしゃる獣医さんの言葉に深くうなづく子どもたち、しっかりと育てようという決意もみられました。獣医さんから、抱き方、えさの与え方、運動、掃除の仕方などを聞き、自分たちで世話をしながら飼育していく具体的な方法を体得したようでした。獣医さんの話の後、かわるがわる抱いてみたり友達に手渡ししたりこわごわとふれあい体験をしていました。この初体験がこの後の子どもたちの飼育活動の原点になるのではないかなと思います。このようにして室内飼育活動を始めたのが1年1組でした。

そして、このころに、うさぎ好きな職員がミニウサギを雌雄つがいで廊下にて飼育し始めました。メスが「ショコラ」、オスが「トラセリア」という名前です。ホーランドロップ種とは異なった品種のうさぎですが、おとなしい性格です。この夫婦であるつがいに正月過ぎたころに赤ちゃんが誕生しました。そのうちの1羽が「マロン」という名前で、4年生で飼育を始めました。

また、1年生に最初に来たうさぎ「ハリー」は、2年、3年、(4年)、6年を1ヶ月ごとに体験飼育をしました。以上のことは昨年度の飼育活動のことです。このような児童の反応や湧いてくる深い愛情の表現を見ていて、職員で話し合い、次年度は全学級でうさぎの室内飼育をしようということに決定しました。

このような経緯で、20年度の現在は、1年1組のうさぎ「ココア」、1年2組のうさぎ「ラッキー」、2年1組のうさぎ「ホップ」、3年1組のうさぎ「ハリー」、4年1組のうさぎ「チョコ」、5年1組のうさぎ「マロン」、6年1組のうさぎ「ロップ」、特別支援学級(以下、なかよし学級と呼びます)のうさぎ「スター」の8羽が学級室内飼育のうさぎ8羽です。このほか先ほどの廊下飼育のうさぎ2羽「ショコラ」「トラセリア」と室外の飼育小屋にいる3羽のうさぎ「ゼロ」「ハナ」「ペリー」の計13羽が本校のうさぎの全員です。

ところで、1年1組のうさぎ「ココア」、1年2組のうさぎ「ラッキー」、なかよし

学級のうさぎ「スター」は、今年の5月末に本校へやってきましたが、子どもたちはまたまた大歓迎でした。3羽ともホーランドロップ種のうさぎで、赤ちゃんうさぎでしたので、これから命を育む飼育活動に新鮮な気持ちで取り組もうとする出発点に立ち、今まで活動を重ねてきています。

### 3 本校のうさぎ飼育に寄せる願い

- 自分や友達の命を大切にするように、うさぎの命を大切にすることを育てる感性を磨いていきたい。
- 飼育活動を通して、自分以外の対象の気持ちをわかって上げられる子どもに育てていきたい。
- 全校での飼育活動を通して、各教室のうさぎの個性を理解したり、扱い方についても体得し、責任感をもって、安全で愛情のある育て方をしていくようにしたい。

### 4 各機関との連携

#### (1) 群馬県獣医師会

各市の獣医師会で学校と連携を取って、各学校へ出向いて動物ふれあい教室を実施してくれています。本校では2年生を対象に1時間をうさぎの抱き方、心音を聴く、えさの与え方を教えるなど、3名の獣医師でグルーピングして細やかに子どもたちに話してくれています。また、飼育委員会の子どもたちへも同様に、飼育小屋のうさぎの飼育の仕方及びうさぎの健康診断をしてきています。年間通して、けがや病気の際の手当てや治療に当たってくれ、親切で安心して飼育ができますので感謝しています。



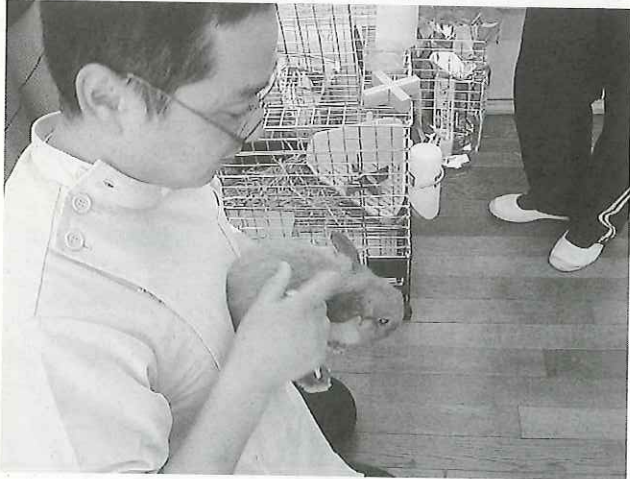
#### (2) 群馬県総合教育センターとの連携

同センターの研修講座では、学校飼育動物の飼い方についての講話と実践(うさぎの扱い方及び抱き方など)を学ぶ機会を設



けてくれています。このことにより教員が学校での小動物などの扱い方や、命の大切さをしっかりと認識することができ、授業に生かす方法・技術を学ぶことができました。また、本校で実際にうさぎの全校飼育している様子を公開する機会を設けていただき他校の教員に成果を広めることができました。センターと共に研究をすすめている阿部獣医師からも「学校での動物の飼い方、接し方」を教えてくださいました。

常時うさぎの健康観察やエサ、ウッドリッター、牧草の補充をしてくださったり、ダニ駆除の薬を滴下(年に2回)してもらいました。また、爪きりをしたり歯の管理などを常に見守ってくれています。



### (3) 校内研修での獣医師による講話

桑原先生よりうさぎの飼育について、どのような教育的効果があるのか、またその飼育方法についてのポイントをお話いただき、全職員で共通理解を図りました。特にうさぎの特性を知り、ふれ合うことで子どもにとって「生きていることを実感する」「動物に対する慈しみの心を持つ」「動物の立場に立ってものを考えることができ

る」など重要な内容をお話いただきました。

## 5 地域・保護者との連携

長期の休業や週末のうさぎ飼育については、学級の事情によりステイをお願いすることにしました。長期休業日前には学校よりお便りを出し、週末等には各学級で家庭にお願いしています。その時点で、うさぎの取り扱い上の配慮事項や飼育の仕方についてお便りを出しています。

主として、金曜日に子どもたちが家へステイにつれていき、月曜日に学校へつれてくるということになっていますので、全校の児童・家庭や保護者はもちろんのこと、地域の方々も子どもたちが台車にうさぎやエサを乗せて運搬する姿を日常の光景と認識し、ほほえましく見守ってくれています。交通指導員さんの中には、台車がなかったときに手づくりの台車3台を寄贈して下さり助かりました。その後学校で4台の台車を購入して、現在は計7台の台車がフル回転しています。荷物がたくさんになり大変なので子どもどうしの助け合いや支援の輪が広がっています。地域や家庭も非常に協力的です。



## 6 学校での実践

各学級では、それぞれに分担を決めて1日に2～3回うさぎの飼育用ケージの掃除をしています。エサや水も随時あげていてうさぎから求めて寄ってきたりするほど信頼関係が深まってきています。学級によっては、掃除中にうさぎの散歩係りがいたり、遊び場を段ボールで作ってあげたり、寒さよけの毛布をかけたりと、お母さんに自分がしてもらおうような心づかいが感じられます。話しかけたり、さわったり、だっこしたりと、自然体でのふれあいが深まっています。子どもたちの話題もうさぎのこのの



ほか、様々に広がっています。8学級の室内うさぎは授業中もおとなしく、学習に関係なくとも時を過ごしています。時には昼寝をしてリラックスしていることもあり、大事にされている様子がうかがえます。子どもたちは、時折様子をうかがったり、なでたりしています。運動会の絵などにうさぎが登場したり、学級の目標に「時間を守る」「ハリーを大事にする」「忘れ物をしない」などがあり、子どもたちの生活にうさぎが根付いていることがうかがえます。うさぎは、けがをすることもあり、病気もあります。秋のある日の朝、6年のロップが「おしりから出血して、腸がでてい」と子どもから連らくがあり、すぐ職員が獣医師のところへつれていきました。なんと妊娠していて、死産の赤ちゃんがおしりからでてきていたのです。ステイの時にどうやら交尾をしてしまったようでした。担任はすぐ学級指導をして、他のうさぎと一緒にしないよう別の場所かケージに入れておくよう話しました。

### 7 成果と課題

○子どもたちがうさぎの飼育活動を通して、自分たちで命を育てているという意識、感性の基礎がつつかわれつつある。うさぎの様子を気にかけてたり、毎日のぞいたり話しかけたりしている様子から、友達のように身近に感じている存在であ

るということは、各学級で室内飼育してよかったことだと思いました。

- 各学級のうさぎの性格・気質・習性は、それぞれちがいがあり、同じうさぎでも発情期やステイ明けなど、体調や環境により異なることに子どもたちも気づいてきているようであります。相手の気持ちに気づかう心情や感性を培う素地をこれからもさらに広げたいと思います。
- 各学級がそれぞれの分担の仕方ですうさぎの世話をしていますが、忘れてたりさぼるなどのトラブルもなく、円滑に役割を果たし、責任意識もうさぎへの愛情から中身を重ねているように思います。
- うさぎアレルギーの子どもは、自ら遠くから見守っているようであるが、毛がとんでいかなないようにいつも教室周辺を清潔にしておく必要があります。
- うさぎも年令を重ねていくので、死とめぐりあうことがあるので、そのための教育計画をしっかりと立てていかななくてはならないと考えます。
- 各組織との連携をとりつつ、うさぎのこと、子どもやステイ先の人へのけがや事故などについても事前に整備していきたいと考えます。



(群馬県高崎市立東小学校校長)

